



# フェローシップ・ニュース No.63



2/17(月) アディクション関連講座No.20

## 「子どもの非行と向き合って」

非行克服支援センター 副理事長  
春野 すみれ 氏

特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日  
2014年3月1日

私はかわいい我が子が非行で悩んだ母親です。私のようなこんなダメな母親は他にいるのだろうか、と当時は自分を責めながら、ただ、見てみると、少年事件で逮捕されている子は、今はちょっと減っているのですが、当時年間13万人くらいいました。補導されている子は100万人くらいでした。そんなにたくさんのお母さんが悩んだり苦しんだりしているのだろうか、と不思議に思ったものです。しかも、当時の私からすると自分は普通の親だけれども、子供と一緒にたむろしている子の親は、きっと普通ではないと思っていました。

だから、自分のように、普通なのに子供は荒れてしまっている親って世の中にはいないのではないだろうか、という気持ちでいて、本当に辛かったです。いくつかの相談機関にも行ったのですが、やはり親がしっかりしないとダメ、そういう親だから「ダメなんだ」、みたいなことを2、3回言われただけで、私はそういうところに足を運ぶことはできなくなり、同じ思いの人と話がしたいと強く思うようになりました。知り合いだった元中学校の先生に相談したら、良いじゃない、やってみよう、と言ってくださって、そこから非行の親の会「あめあがりの会」をつくることになりました。

今言ったような経緯ですので、会を作ってこういう風にしようとか、こういうモデルがあるから、これをやりだせばこういう風になるとか、そういうものは全くなくて、本当にゼロのところから、とりあえず死んだ方が楽かな、と思っている自分を立て直したい、同じ思いの人と今を乗り越えたい、そういう気持ちで作りました。この非行と向き合う親たちの会は、辛さを語り合うことで、なんとか生き延びようという風な思いで作りました。

ところが、その会が出来たということが新聞などに載りますと、全国から「私も悩んでいます」と言う人が来ました。知らない私たちのところに他人には言えない恥ずかしい話を持ってくることにとっても驚きましたし、そのことで私自身が、この会は必要な会だったのだともものすごく励まされました。

非行と言ってもいろいろです。事件を起こしてしまえば非行なのですが、学校的なレベルでいうと、例えば校則に違反した、リボンの色が違うとか、靴下が違うとか、そういうことでも処分される学校では処分されています。そういうことで「うちの子非行なのです」といって飛び込んでくる人もいれば、「うちの子は3回目の少年院に行っています」とか、成人になってからいろいろ事件を起こして、という方もいらっしゃいます。さまざまな人が同じテーブルで語り合っています。悩みとしては、事件が大きければ大変さはもちろん大きいのですが、悩みとしては、事件の大きさなどにかかわらず、皆苦しんでいるな、というのが私の印象です。私自身がもそうでした。こんな風に私たちの親の会というのは、親自身が運営しているところです。段々と子供がちょっと手を離れてきたかな、というような人たちや、今もまだ少年院に入っている子のお母さん、事件を繰り返して起きているような子のお母さんたちも、世話人として運営側に回って一緒にやっています。先日、アンケート調査をしたのですが、やはり「この会では他のところで話せなかったことが話せる」だとか、「話がちゃんと入っていく、伝わっている、そういうところは他になかった」だとか、そういった回答をたくさんいただいて、このやり方でよかったんだな、と思っています。

### <非行娘と不登校娘と>

うちの子のことはたいしたことではないので、あまり長くお話ししてもしょうがないのですが、娘が14歳の時に子どもの変化に気付きました。ところが娘の側からすると、小学校6年生くらいから友達関係などいろいろとあって、自分の気持ちは荒み始めていた、というようなことをだいぶあとになってから聞きました。それは私には全く見えていませんでした。元気のいい、かわいい楽しい子というだけでした。

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute) の略称です。  
全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

### 目次 :

子どもの非行と向き合って…春野すみれ氏	1
アパリ法律事務所より…平林剛氏	5
アウェイクニングハウスからのメッセージ…ウッチー	6
各種家族教室のご案内	7
司法サポートのご案内 家族教室のスケジュール	8

おかしいなと思ったのはタバコという具体的なものが目の前に出されたときからです。「えっ?!」と信じられず、この子に私は騙されている、という風な気がしたのです。その子の下にもう一人、3歳違いの女の子がいます。二人は同じ親から生まれ同じごはんを食べて育てているのですが、性格が違って、下の子は中学1年から不登校になりました。

上の子が非行になって、中2で私はかなりパニックになって、仕事もしながらその子を追いかけ回していました。夜はとにかく毎日探し回る、探し回って見つけてしまったらまたそこで喧嘩になる。見つからなければ悲しくて眠れなくて、悶々として暮らす、みたいなそういう毎日を送っていたのです。下の子のことを忘れていたわけではありませんでした。ただ、その子のためにも、お姉ちゃんをなんとかしないといけない、あなたのためにも、お母さんは今お姉ちゃんのことでも精一杯やってみるからちょっと待っててね、みたいな気持ちでした。下の子は大人しい子だったので、「あなたは大丈夫ね。」「あなたはお友達と仲良くやっているわね。」「今日も楽しそうに学校行っているわね。」という風なことを思いながら、その子の前では非行娘とのバトルをできるだけ避けて明るく暮らす努力はしていたつもりでした。

私は上の子に、半年くらい、とにかくしゃかりきになって向き合っていたら、その子はまた元のようになってしまう「クソババア」から、「ごめんね、私が悪かった」と言ってくれるのではないかと思いました。ところがどんどんひどくなってきて、「クソババア」どころではなく、「ウザい」「死ね」「消えろ」「なんだその目は」だの、狭い家の中ですれ違っただけなのに、「てめえこっち見るんじゃねえよ」とか言われて、なんかもう悲しくてしかたありませんでした。そして、下の子に「大丈夫ね」と思いながら、一年半が経ってしまったわけです。下の子が中学校に入学しました。気が付いたときには、学校に行っていなかったのです。学校で何かあったのだと思います。下の子に、あとになって聞いたことがあるのですが、本人は、今でも「理由はわからない」としか言わないのですが、その時も何かあったの？ 学校で何かあったのだしたら、お母さんに言ってくれたら、お母さん対応するよ。」と下の子に言いました。しかし、彼女の口から出たのは、「お母さんに相談なんかできるはずないじゃない、お母さんはお姉ちゃんのものじゃない。」の言葉でした。もうびっくりしました。お姉ちゃんとお母さんはいつも喧嘩しかしてないじゃない、あなたの前であなたが羨ましいと思うような関係ではないじゃない、と思うのですが、そうではなかったのです。子供ってやはりかまってもらおうというのは、下の子にすると、私がしゃかりきになって上の子を追い掛け回してあなたは何しているの、上の子に対して、あなたはどこにいるの、お母さんの愛情がわからないの、こんなにお母さんはあなたを大事に思っているのにどうしてあなたは「クソババア」って私を言うの、とそういう思い。それは半分恋人みたいなものですよ、片思いの。下の子の言葉からすると、それは、「お母さんはお姉ちゃんのものだ、私の方なんか振り向いてくれない。」という思いがあったのだと、その時初めて知りました。

そこで、私は諦めたのです。上の子を追い掛け回すのは、もう無理、と。下の子をこれだけ犠牲にして私は上の子を追い掛け回していたのだ、ということに初めて気が付きました。親の会を作ろうと思ったのはその直後です。先ほど言ったように半年間は私が頑張れば子供は私のところに帰って来る、と思いがあって一人で頑張ってしまったなと思います。でもそれはやはりできなかったのです。夫はいますが、夫は溺愛していた娘が不良になって私以上におろおろしてしまっていました。

下の子が学校に行きたくないと言って泣いていた時、「本当に行かないの?」と聞いたら、「行かない、絶対に行きたくない。」と言い、「何があったの?」と聞いても、「別に何も無い、言わない。」と口を閉じました。「じゃあ、行かなくていいよ。」と言ったら、ものすごくホッとしたような良い顔をしたのです。

「行け!」と言わずに済んだので、下の子は不登校で3年間過ごし、結局一人で校長室で卒業証書を受け取りましたが、ずっと明るい不登校でやっていくことができました。

下の子はそこから、通信制の高校にすごくスローなペースで行き、だんだんと気持ちも回復してくるのですけれど、そういう娘たちの母親になって、やはり一番大変だったのは自分の価値観を転換する、ということだったと思います。

### <自分につきつけられたもの>

不良娘の方はいろいろなことをやってくれて、何回か捕まっているのですが、鑑別所には行かないような事件でしたが、最後はホステスさんをやりました。16歳だったと思いますが、20歳くらいと偽ってやって捕まって家に帰ってきました。その時は覚せい剤もやったとあとから聞きました。

ホステスさんのアルバイトは中2の頃からやっていたと思いますし、その後は暴力団の事務所にお手伝いに行ったり、暴走族に関わったり。19歳で結婚したのですが、その相手は少年院を出た暴走族の頭だった男の子です。野球で将来を期待され、挫折した少年でしたが。そういうことが、数年という短い間にありました。一応全部試してみないと気が済まなかったのか、その全部が私は嫌でした。



春野すみれさん

特に女を売り物にする、みたいな価値観とかそういうのは本当に嫌で、しかも、私が嫌だと思うことを、どんどんやっていくというのがわかるのです。シンナーも嫌でしたし、もちろん覚せい剤も嫌でした。全部嫌でした。ずっとまともになってからついた仕事は、トラックの運転手でした。

無免許でバイク乗ったりとか、車に乗ったりしていましたが、18歳になってすぐに車の免許を取りました。自分のお金で取りました。今度は無免許で乗らなくなって良かったな、とは思ったのですが、免許を取ってすぐ、「トラックに乗る。」と言い出しました。もうトラックなんて乗用車の免許取ったばかりの18歳の金髪のちびの女の子が、乗れるはずないでしょ、好きにしたら、と思っていたのですが、驚いたのは次の日には探してきました。高校も中退し、トラックの運転手になりました。正直言って、それも嫌でした。あれよりましか、これより良いか、みたいなそういう風にしか考えられなかったです。

そういう一つ一つのことがらに自分が試されます。ホステスさんのときも、法律に達していないとか、そういうこともあるのですが、「なんでホステスはいけないのか。」と言われたときに、言葉に詰まりました。確かに私の友達でホステスさんもいるし、子供の同級生のお母さんでバーみたいなお店のオーナーをやっている人もいました。私もそういうところに飲みに行ったりするのですが、なぜかうちの子がやるとなると嫌なのですよね。「何で嫌なの？」と言われたときに、正直ちゃんと言えなかったです。「こういう仕事はいけない仕事なの？」と聞かれても、「いや、いけない仕事じゃないし。」みたいな。「じゃあ何がいの？」と言われたら、「学校の先生や保育園の先生がいい」とか、自分や自分の周辺にいる人のことしか浮かばないです。私という人間の幅の狭さを本当に思い知らされました。ああ、でもそれでも良いんだ、と一つ一つそうやって自分を変えていきました。

そういう意味では、学校に行かないという選択もありなんだ、ということがだいぶ自分の中に定着してきたところだったので、下の子に対しては無理強いをしないで済んだわけです。上の子は一つ一つが初めて突きつけられることだったので、本当に自分との闘いだと思いました。そうやって「私の価値観の中にいて欲しい。」という思いが、彼女をより遠くに飛ばしていったのかな、ということと、その私自身の壁はそんなに厚かったのかなと今は思ったりします。例えば歌舞伎役者だから歌舞伎役者にならなきゃいけない、とかそんなものは持っていない家なので、大きな締め付けがあったとは思えないのです。それでも、可愛がって育てた女の子なので、私以上の人になって欲しいとか、私より幸せになって欲しいとか、そういう願いがいつの間にか、私の存在が彼女に壁となっていたのかなと思ったりしています。子供に突き付けられ、自分は何かを職業に差別をしていないか、とか、人間に対してこういう人間は良くて、こういう人間はだめとか、人にランクをつけたりしていないかとか、そういう一つ一つが覆させられることで、自分の一面性に気づかされました。

そういう中で会を作ってみたら、地方からも、近くからも見も知らない人がやってくるわけですよ。 「うちの子がこんなことしてます。」と事件が報道された新聞記事を持ってきた人もいます。

日本中の親は、みんな、いや世界中かもしれないですけど、頑張っていることを知りました。誰もその頑張りを褒めたりしてくれていないけど、でもみんな頑張っていて、すごいと思いました。そういう人がたくさん来て、語り合っている中で、子供からも教えられ、やはり親たちからも教えられて、自分が鎧を少しずつ、一枚ずつ脱いでいって、楽になってきたかな、という実感はあります。

こちら、家族の会ということできっといろいろなお話をなさっているのだと思いますが、私も子供が非行にならなくて、あるいは不登校にならなくて、あのまま子供が生徒会の役員やって吹奏楽やってリーダーみたいな子のままで鼻高々になっていたら、気づかないまま、良かれと思って、本当に困っている人にひどいことを言っていたかもしれないという気はします。

あるお母さんが、うちの会にやって来ました。女の子のお母さんですけど、「もう子供が大変です。子供が夜中に夜遊びに出ていくのを止められないので毎日すがってみたり、泣いてみたり、怒ってみたりいろいろなことをするけども、子供は出て行っちゃうんです。もう本当に辛いです。」と言っていたお母さんが、あるときテレビのワイドショーで渋谷で17歳の子たちがひどい目にあったという事件がニュースになったとき、「だいたい夜中に中学生や高校生を渋谷の街に出す親がいけないんですよ。」と話題になって、みんなで「そうだ、そうだ」と言っているというのを聞いたわけです。「普通の親だったら体を張って止めるのが普通でしょう。」「行かせるなんて親ひどいですよ。」というのを聞いて、その日はとにかく体を張って止めようと決意したそうなのです。出ていこうとする子供に、「今日は絶対にダメ、それでも行くならお母さんを刺して出ていきなさい。」と言って包丁を出したそうです。まさに修羅場を迎えようとしたのですが、子供の方がちょっと賢くて、「お前なんて刺したって意味ない。」なんて言われて、蹴飛ばされて、結局出て行かれちゃうんです。

その事を、泣きながら、「私は何をやってもダメな親です。」と報告したわけですが、みんなで「子供を刺さなくて良かったし、子供に刺されなくて良かったよね。」「そんなことで刺し合っていたら、日本中、女の子いなくなっちゃうよ。」とみんなで語り合うことができました。



講演終了後  
打ち上げにて

## 脱法ドラッグも 逮捕されます！！

厚労省は1300物質以上を指定し、指定薬物の輸入、製造、販売等を犯罪として規制していましたが、これまでは所持、使用、購入、譲受については犯罪とされていなかったのが、乱用者が急増して大きな社会問題となっていました。

そうした背景から薬事法が改正され、平成26年4月1日から所持、使用、購入、譲受が新たに犯罪となり、違反者に対して3年以下の懲役又は300万円以下の罰金またはその両方が科せられるようになります。

(資料源：<http://www.mhlw.go.jp/topics/2014/02/tp0205-1.html>)

アパリでは薬事法の指定薬物自己使用事犯者の支援もしますので、どうぞお気軽にご相談ください。

一つ一つ、他の人の話から学びになるし、「みんなこうやって頑張っているじゃない。」「そんなことで止められるならこんな苦労してないよね。」と最後はみんなで泣き笑いになりました。

そのうち段々と、親たちを通して子供たちの声が聞こえてくるようになるのです。私は最初に会を作ったときは、親は正しいけれど、子供はやはり正しくない、もう許せない、とっていたのです。子供の話なんか聞きたくもない。嘘ばかりつくのですから。こんなに嘘ついたりごまかしたり、人を騙したり、そういうことが平気な子供たちとは話もしたくない、という思いがあったのです。でも親たちの話を聞いていると、さっきの子供もそうですけども、「てめえを刺して自分が少年院に行くのなんかごめんだよ。」と言われたとか。「お母さんも先生も嫌いだとか言って、2階の窓からうちの子、勉強机を放り投げたんですよ。」というお母さんもいました。それから「うちは毎日壁に穴が開いています。」というお母さん。怖いですよ、家庭内暴力みたいなことがあって、「もういい加減にやめてちょうだい。」と叫んだときに、子供が言ったそうです。「俺だって穴なんか開けたくないんだよ。」と。みんな「開けなきゃいいのにね」と笑いながら、自分の子の口から聞かなくても、他の人の話から、「ああ、そうなのか、やりたくてやっているんじゃないんだ。」とか、そういう子供の気持ちを聞けたりしています。

去年、立ち直った子供たちのインタビューもしたのです。いろんな子の話を聞くことができました。立ち直りもいろいろです。長いことかかった子もいれば、すぐに気が付く子もいるのですけれども、子供たちをインタビューして、私たち親も含めて、やはり追いつめているのは社会だな、大人の側だな、という印象はとても強くあります。

どの子の話からも、非行には、パターンとかそういうのはなくて、本当に一人ひとり違うということがよくわかりました。今、子供たちがひどいとか、子供であっても許せないとか、そういう意見がだいぶ強くなっています。実際にはものすごく犯罪率は減っています。子供の数も減っていますし、うちの上の子が捕まっていたときなんかは刑事事件の子供の逮捕の数が13万人でした。今は8万人切るくらいじゃないでしょうか。そのくらい子供の事件は減っているのです。少年院も、ガラガラですよ。しかも、私も今、相談を受けたりしていますけど、ずいぶん軽い事件でも入っているな、という感じはします。軽くても少年院に入るのが良い場合ももちろんあるので、そのことが悪いと言っているわけではないのですが、こうした現実があるのになぜこんなに厳罰、厳罰と言われ、「子供がひどくなっている、悪くなっている、もっと罰を強めなければ。」という風潮になるのかなと、とても不思議な気がしています。そういう中でやはり子供たちは、社会の犠牲になっているなということ、まわりの環境が整っていけば、必ず戻ってくる、そういう思いを強くしています。42人の立ち直った青年をインタビューしたのですが、そのうち最少年院入院回数は、一人だけでしたが少年院に4回入った子がいるのです。15歳から20歳までに4回少年院に入っているのです。1回目は短期とって6か月なのですけど、あとの3回は1年なんです。その前に留置所や鑑別所にも合わせて約2か月くらい入りますから、そういうのを合わせると、その子は15歳から20歳までの間にほとんど普通のところにはいなかった。そうやって出入りをしていたのですね。その子には、私がインタビューしたのですが、さわやかな良いマスクをしていて、色も白くて背も高くてかっこいい子なのです。話をしていると、ものすごく男気があると言うんでしょうか、絶対に自分の仲間を売ったりしないし、後輩を守ってその子がやったことも自分がやったことにしたりとか、非行なんですけどまっすぐな子なんです。そういう人情の熱い子なのです。その子が言った言葉が本当に印象的でした。彼は4回目は特別少年院というところに入るのですが、そこがすごく良かった。先生たちも良かったし、経歴のいろいろある子が入っているわけですが、そこで運動会をやっても文化行事をやっても、みんなでものすごく団結して、一緒にいるその子たちが悪いことをした奴らとは全然思えないと言うのですよ。「良いやつばかりで、すごく良かった。」「そこで変わった。」という風に言っていたのです。「じゃあ、その前の3回の少年院は彼にとって意味がなかったのか？」とよく言われるらしいんですよ。前の3回の少年院では、出てきて、また同じことをやってしまったり、前回以上のことをやってしまったりして、またすぐ捕まるということを繰り返していたわけですよ。一体その教育は何だったのか、とか、そこに3回も入る必要はあなたには無かったのじゃないかと聞きたくなりますよね。彼は、「1回の少年院で立ち直る子は、すごいやつだと思う。」とっていました。「自分は、最後100パーセント変わったのは、最後の少年院だった。だけど、それまでの少年院でそれぞれ25パーセントずつ変わっていたんだ。」と言うのです。そうやって変わっていたから、4回目の少年院で100パーセント変わることができたのだ、という風に言って、「どの過程も今の自分にとって大切で必要な過程だった。」という風に言っていました。わあすごいなと思って。ちょっとずつ変わっていった。本当に必要な場所だった。必要な過程だったものすごく思いました。わあすごいなと思いましたが。ちょっとずつ変わっていった、本当に必要な場所だった、必要な過程だった、その言葉にとっても心を打たれました。

### 近藤恒夫著 ほんとうの「ドラッグ」 販売中！

この度、小学校高学年～中・高校生向けの薬物依存症を理解するための本ができました。学校教育の現場でご活用してはいかがでしょうか？

発売：講談社  
定価1,260円（税込）

全国の書店でお買い求めください！  
アマゾンでも購入できます！

### <支援者へのそむこと>

あってはいけないことですが、少年院を出てから、高校に入り直そうと思った子がいます。自分が卒業した中学校に行って、「これから入れる学校はありますか?」と聞いたら、先生から「お前の入れる学校はないよ。」「定時制もあるけど、それも無理だ。」と言われました。私は通信制なら入れると友人に聞いて、もう一度中学校に行ったら、「何だそんなところでいいんだ!」と言われましたが、内申書を書いてもらいました。その封筒が透けているので見たら、所見の欄には、「こいつはワルでどうしようもないやつだ。」というようなことが書かれていたそうです。少年院で勉強の楽しさを知ったのですが、その思いはこうしてこわされました。その子は自分の力で立ち直ってきましたが、世間の風は厳しいですね。

先日少年院を出た子も、「履歴書にどう書こうか?」と聞いてきました。「少年院のことは言わなくていいんだよ。」と言いますが、人間関係ではそれでは済まないこともありますよね? 仲良くなっているいろんなことを相談されて、信頼されて、自分のことを言わないでいるのは辛くなりますよね。辛さの中で生きていく中で理解者がいれば幸せです。そういう人が周りに必要だなと思います。社会に出て生きていくのは難しいことがたくさんあるなとすごく感じています。実際問題、就職しても小さな入れ墨があったり、事件を起こしたことがわかって仕事がクビになったりということは身近にあります。もっともっと社会が優しい場所であって欲しいなと思います。

ある男の子が、「立ち直ったとか更生したとか自分は言えない。絶対ケンカしないとか、約束できない。でも、そういう失敗をしてもやり直す、そういう人間でありたい。」と言っていました。

私たちだって、絶対に失敗しないなんて、何があるかわからないので言えません。子どもたちもそうなんだと思います。一度も失敗しない人生なんて何もしなかったと同じじゃないですか?

こういう活動も続けてやっていけば、大変になったり、疲れたり、時には失敗して謝ったり、お金のことで苦労したりします。何もしなければこんなことも起きないのに。やるだけでリスクは伴う。家から出なければ何も起きないけれど、そういうことを恐れていたなら何もできなくなってしまふ。失敗してもいいんじゃないの? とそういう感じで生きています。

親たちの会を作った数年後に、NPO法人非行克服支援センターを作って、少年本人への支援も行うようになりました。少年事件の付添人をしたり、学習支援(勉強をマンツーマンで教える)や就労支援をしています。親も子も、大きく、成長していく姿に日々励まされて、元気をもらっています。



## アパリ法律事務所より



平成26年1月8日に、アパラインテグレーションセンター内に、アパリ法律事務所を開設させていただきました、弁護士の平林剛(ひらばやし 剛)と申します。

私とアパリの出会いは、弁護士になるための研修中(司法修習中)でした。もともと、刑事事件の更生に向けた情状弁護に興味を持っていた私は、司法修習生として、刑事裁判所における研修、検察庁における研修をする中で、更生に向けて、その人の環境そのものを調整していく必要性を痛感しました。そういった問題意識を持つ中で、恩師からアパリをご紹介頂き、司法修習の自己開拓プログラムで研修させていただいたのが、アパリとの出会いでした。

司法修習修了後、私は、法テラス(日本司法支援センター)という、お金がない方に法的なサービスを提供する法律事務所の常勤弁護士となるため、鹿児島県の法律事務所で1年間執務し、その後、埼玉県熊谷市にある法テラス熊谷法律事務所で執務しました。その中で、本人の環境調整はもちろんのこと、ご家族も大きな問題に巻き込まれ戸惑いを持っていること、困っているのは間違いないが何を相談したらいいのかわからない状態にあることを知りました。

そういった経験から、刑事弁護のみならず刑事裁判後に積み残された問題解決への支援を目指して、アパリ法律事務所を設立いたしました。

いま、ご自身がお抱えの問題が、法的な問題なのかそうでないのか、そういったことを判断するのは弁護士の仕事です。これは「法律相談」ではないから相談に行っても、と思わずに、「困りごと」をお気軽にご相談ください。

<お問い合わせ先>

TEL:03-5925-8410

mail: apari@hiraba.jp (代表)



### 平林剛弁護士より

※本ニュースレターを見たとおっしゃった方については、平成26年9月末日までの間、初回相談を無料で承りますので、お気軽にお問い合わせください。

※正確を期するため、法律相談に対するメールでの回答は控えております。

## アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

### 「日本ダルク アウェイクニングハウスに入寮して」

アルコール依存症 ウッチー

自分は41歳の男性です。自分がアルコールに問題があると自覚するまでは、ごく普通に生活をして居ました。21歳で親元を離れ一人暮らしを始め、仕事も真面目にして居ました。元々お酒は好きな方でした。お酒を作る事に興味を持ち、バーテンダーの仕事を6年間やっていた事も有りました。その後は転職を繰り返し色々な職業に就きましたが、どの仕事も自分なりに努力をしベストを尽くし、頑張りました。しかし段々と飲酒のコントロールが効かなく無り、休日は朝から1日中飲むようになり、出勤前や仕事中に隠れて飲むようになってしまいました。

その頃から酒で問題を起こす事が多くなり、自動車免許証の取り消し処分を受けたり、30歳を境に暴力事件を起こし、裁判となり3年の執行猶予の処分も受けました。その後、何とか執行猶予は切れたもの警察の世話になる事が度々有りました。依存症の自覚は有りましたが、止める気はまったく無く、病院等には行きませんでした。最終的には刑務所に行く事になり、それを機会に親からは縁を切られ、出所後は住む場所も仕事も在りませんでした。住み込みの仕事もしましたが、うまく行かずやめてしまい、1人ではどうしようも無くなり、生活保護のお世話になるしかありませんでした。最初の内は一時的に受けるだけで、すぐに自立するつもりでしたが、禁止されている酒を何度も飲んでしまい、生活保護を打ち切る寸前にまでなりました。

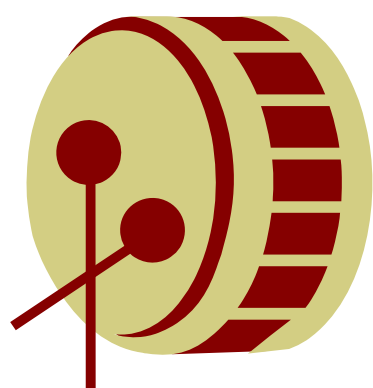
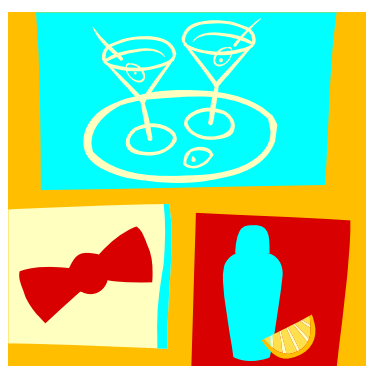
ただし最後のチャンスとして、ダルクに入寮する事を条件に生活保護を受ける事が許されました。僕は仕方なく、群馬県の日本ダルク アウェイクニングハウスに行く事にしました。ただその状況になっても酒を止める気にはなれずいました。が、いざ施設に向う途中の車の中で施設の場所が山の上に在り、近くにはコンビニや、スーパーが一軒も無い事を知り、酒を買う事は不可能だと思いショックを受けました。それと同時に薬物依存者のリハビリ施設と聞いていたので、「どんな狂った人が居るのだろうか？どんな悪い人が居るのだろうか？」と不安でいっぱいだったのを覚えています。しかし実際には薬物を使っていない仲間は普通で、思いやりも有り、やさしい人ばかりでした。

完全に禁酒する気にはなれませんでした。半分諦めの気持ちで、僕は生活費を仲間に預ける事を決めました。3ヶ月間サイフを持ってもらい、その仲間の手助けによって飲酒欲求が消え、僕のクリーンタイムが始まりました。

プログラムの一つである琉球太鼓（エイサー）を初めて見た時は「何だこりゃ？」という感じでした。音楽は沖縄の民謡みたいで、ROCK好きの自分の好みとはかけ離れていたし、衣装も格好悪く思いました。それでも自分を殺し、やる気を持ち、自分なりにベストを尽くしました。エイサーに打ち込み、練習を毎日続け、テストを受けて合格して人前で演舞することも許されました。このエイサーの良さは、体力もつくし、精神的にも成長できると感じています。仲間と一緒にやることで、一体感や達成感が持てるし、人前で叩く事により自信が持てるようになりました。今では、イベントやお祭り、老人ホーム等様々な場所に呼んで頂き、多くの人に拍手を貰い、仲間と共に成長し、社会と触れ合うことで少しでも貢献できれば良いなと考えています。

過去には、エイサーでリーダーをやらせて頂き、良い経験をしました。リーダーシップを取る事で自分を律する事が出来たし、変わった気がしました。その他にも部屋長、各役割のリーダーまでまかせて頂きました。色々なプログラムを通して、仲間と関わりを持つ事でお互いに信用、信頼を深められて居ると思います。3ヶ月に一度は部屋変え、役割変えをしていて、色々な仲間と生活をしています。時には喧嘩や、トラブル、問題も起こりますが、職員も含め全員で話し合い解決していき、より良い生活が送れるよう、日々努力しています。

ミーティングは毎日有り、施設内では午前、午後と二回行なわれ、夜には外部の自助グループのミーティングに参加しており、けっこうハードですが、依存症からの回復について、仲間と分かち合いをしています。



プログラムは厳しい事ばかりでは無く、夏には川遊び、ソフトボール、仏画、アート、音楽等が有り、月に一度は、温泉や食事会に行き、時にはボーリング、美術館、映画に行く等、楽しい行事も有ります。

現在僕は、施設に繋がって2年が経ちます。その間、飲酒をする事は一度も無く、クリーンタイムも2年になります。未だに完全に禁酒をしようと言う決心はついていない気もしますが、最近ではアディクション（依存症）に対して、無力だという気持ちが除々に芽生えて来たと感じています。以前は、飲みたいなーと思った時、必ず楽しく飲む事をイメージしていました。言い訳や正当化も強かったのですが、今は飲酒欲求が沸いても、まず先に『二度とアディクションには戻りたくない。自分は二度と酒をコントロールして飲む事は出来ない。一杯でも飲んだら終わりだ。アルコールは自分にとって薬物だ。』と思えるようになりました。

現在の正直な心境は、「早く施設を出たいなー。」と考える時も有ります。早く社会に出て仕事をしたいし、自立したい、自由な生活がしたい、彼女がほしい、と言う事を強く思っています。しかし、自分の意思だけで退寮を考える様では、まだ時期では無いのでは？もっと施設長や、スタッフの方達と今後の事について、良く話し合う必要が有るのでは？とも思っています。幸運にも、丁度今、職員のお手伝いをやらせて頂いています。その中で、社会復帰に向けての訓練をさせてもらっています。

今こうして、皆様に読んで頂いているフェローシップ・ニュースにメッセージを載せて貰っている事も本当に良い経験です。ありがとうございます。今後あと、どのくらい施設にお世話になるのか解かりませんが、希望を持ち続けて、仲間と共に回復の道を歩んで生きたいと思えます。

### 少年事件の家族教室 開催！

昨年9月より、おおよそ月に1回程度、少年事件の家族教室を弁護士と協同で始めました。参加者はまだ少ないですが、少人数の中で、今困っていることを分かち合ったり、子供とのコミュニケーション方法を学ぶ場となっています。主に少年院に入院中、試験観察中、保護観察中の子供を持つ親を対象としています。場所は協同で行っている弁護士の事務所をお借りして開催しています。参加費は現在無料（今後変更の可能性あり）です。参加をご希望の方はお気軽にご相談ください。初回面接を1時間程度行ってからの参加となります。  
講師：志立玲子（精神保健福祉士）、アドバイザー：高橋洋平（弁護士）

### 薬物事犯の奥さま会 開催！

2月より月に1回、薬物事犯で逮捕された、あるいは受刑中の夫を持つ妻の立場の方の分かち合いの場として「奥さま会」を開催することにしました。夫の不満や愚痴、または子育てであったり、自由にお話いただく場になります。また、今後の方向性を一緒に考えていくことを目的としています。まだこちらも少人数で、司法サポートを契約している方のみ参加していますが、今後は、そうでない方でも参加していただくように思っております。お茶を飲みながらリラックスするつもりでご参加ください。

### <今後のアディクション関連講座>

3/17(月) No.21スペシャル座談会「ダルクの責任者による座談会」  
東京ダルクの幸田実氏、仙台ダルクの飯室勉氏、山梨ダルクの佐々木広氏のダルク責任者3名をお迎えし、テーマ「私とダルクとの出会い」「ダルクにおける回復とは？」について座談会を行います。年に一度のスペシャル企画ですので、どうぞご参加ください。

4/21(月) No.22「弁護活動から見た本人・家族」平林 剛弁護士（アパリ法律事務所）  
ご要望に応じて、借金や生活保護についても触れていただきたいと思います。他にもお聞きになりたいことがあれば、遠慮なくご質問ください。

5/19(月) No.23「アパリ・ダルク今後の展望」近藤 恒夫（理事長）  
近藤恒夫から家族や支援者に向けて、メッセージをお伝えします。どうぞお楽しみに。

お待たせしました！  
「拘置所のタンポポ」  
が増刷されました！

#### 拘置所のタンポポ

日本ダルク代表  
近藤恒夫 著

- 目次  
プロローグ のりピー、ダルクへおいでよ
- 第1章 絶頂からの転落～そして再起 わが波乱の半生
- 第2章 誰が、なぜ、ヤク中になるのか
- 第3章 あまりに知られていない覚せい剤の世界
- 第4章 なぜ薬物依存者は立ち直りにくいのか
- 第5章 立ち直るためにはどうすればよいのか
- 第6章 新生した仲間たち

■発行：双葉社  
価格：1,470円（税込）

※お買い求めの方は下記へFAXでお申込みください。  
FAX：03-5312-7588  
日本ダルク インテグレーションセンター・杉本まで

※住所、氏名、電話番号、ご希望数をご記入ください。



家族教室についてのお問い合わせは、志立（しだち）までご連絡ください。

TEL：03-5925-8848



特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

○アパリ東京本部  
〒162-0055  
東京都新宿区余丁町14-4  
AICビル1階  
電話：03-5925-8848  
FAX：03-5925-8984  
Email：info@apari.jp

○アパリ藤岡研究センター  
(運営：日本ダルク アウェイク  
ニングハウス)  
〒375-0047  
群馬県藤岡市上日野2594番地  
電話：0274-28-0311  
FAX：0274-28-0313

○入寮費：月額¥160,000  
(初月のみ¥175,000)

\*生活保護の方も可能

○入寮条件：薬物依存症から回復  
及び自立をしようとしている本  
人。男性のみ。年齢制限はありま  
せん。

○入寮期間：個人により差があ  
るので、話し合いながら決めてい  
きます。



5/1よりホームページがリニューアル  
しました。ぜひご覧ください。  
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫  
編集責任者：志立玲子  
平成26年3月1日発行  
定価 1部 100円

### ＜アパリの司法サポート＞

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決を受け、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。

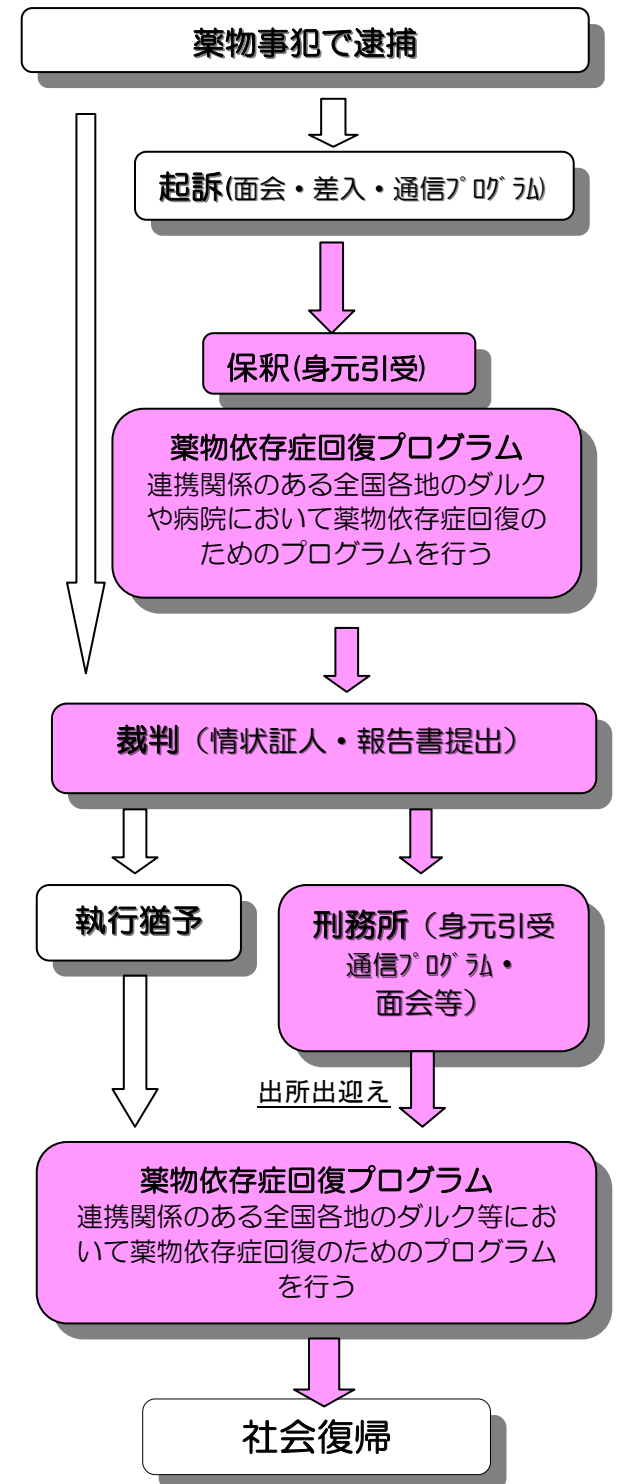
保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本の覚せい剤事犯の再犯率は約60%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は10%以下です。最近では特に、受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

ギャンブルの問題が原因で逮捕された方の司法サポートも行っています。(窃盗、横領、詐欺等)ご相談ください。

[費用：コーディネート契約料として一律21万円(税込)。交通費・宿泊費の実費が別途必要です]

【お問合せは東京本部まで】

### アパリの支援



### ＜アパリ・家族教室＞

第1月曜	連続講座・テーマ	第3月曜	アディクション関連講座・テーマ・講師
3/3(月)	第6回 子どもの成長を助ける関わりについて	3/17(月)	No.21 スペシャル座談会 「ダルクの責任者による座談会」 ダルク責任者3名(東京・仙台・山梨)
4/7(月)	第7回 薬物問題を持つ人の家族の 回復プログラム	4/21(月)	No.22 「弁護士活動から見た本人・家族」 平林 剛弁護士(アパリ法律事務所)
5/12(月)	第8回 あなたの環境や状態をいいものに 変えよう	5/19(月)	No.23 「アパリ・ダルク今後の展望」 近藤 恒夫(理事長)
6/2(月)	第1回 薬物依存症によるダメージと回復	6/16(月)	No.24 「保護観察官の仕事」(仮) 生駒 貴弘氏(長野保護観察所所長)
7/7(月)	第2回 薬物の欲求と「きっかけ」「危険な状況」 への対処について	7/21(月)	祝日のため休み

【対象】

○連続講座(全8回)は家族のみが参加可能で、どの回からも参加できます。

○アディクション関連講座はどなたでも参加できます。

【時間】18:30～20:30 【場所】アパリ・インテグレーション・センター

【参加費】3,000円(一 가족の場合4,000円) 【申し込み】不要